

テ形複雑述語の多義性をどう捉えるべきか

——文法化アプローチと拡大的合成アプローチ——

中 谷 健太郎

日本語におけるテイク、テクル、テアゲル、テクレル、テモラウ、テオク、テシマウ、テイル、テアル、テミル、テミセル、テホシイなど「V1 テ V2」型のいわゆるテ形複雑述語の意味論については、国語学・日本語学の分野では通常「補助動詞 V2」の多義性の問題として扱われてきた（たとえば寺村 1984）。しかし多義性が母語話者の言語知識の中でどのような形で実現しているかという問い（Pustejovsky 1995）に答えようとした場合、単に用法を羅列するだけでは不十分である。さらに、母語話者には「補助動詞 V2」が「本動詞としての V2」と形態論的・意味的に関連しているという直感があり、その直感（これを仮に「語彙的關係性」と呼ぶ）が言語知識の中でどのような位置を占めているかという問題についても言語理論は応えるべきである。

この語彙的關係性について、拡大的合成（Jackendoff 2002）を通した共時的派生として捉える立場（Nakatani 2013）があるものの、先行研究では、明示的であれ非明示的であれ、文法化の問題として捉えられることが多い（Shibatani 2007；三宅 2005など）。中でも特に明示的に文法化のアプローチを提唱する Shibatani (2007) は、寺村 (1984) のテクルの意味漂白化についての分類を批判し、尊敬語化、項構造、断片化、否定の作用域の振る舞いの違いをもとに、あらたな「文法化の連続的変異 cline of grammaticalization」の諸相を提唱している。本稿では、ここでいう「文法化現象」が実際に何を捉えているのかについて批判的に検証し、特に共時的な現象を文法化として捉えるとき、それがタクソノミーにとどまってしまう危険性を指摘する。そしてテ形複雑述語についてはタクソノミックな文法化仮説よりも、母語話者の共時的な意味計算に重点をおいた分析が説明仮説としてはより妥当であることを示す。

1. テ形複雑述語派生メカニズムのステータスについて

以下に例示するように、テ形複雑述語は表層的には V1 テ V2 の形を取り（(1j) については V2 にあたる部分が形容詞）、通常 V2 のほうが意味的に軽減される。

- (1) a. 田中さんが手紙を送ってきた。
- b. ともだちが宿題をやってくれた。
- c. ともだちに宿題をやってもらった。
- d. 賞味期限切れの豆腐を食べてみた。
- e. ビールを10本飲んでみせた。
- f. あらかじめ準備しておいた。
- g. 花瓶を割ってしまった。
- h. 宿題をやってある。
- i. 宿題をやっている。
- j. ともだちに宿題をやってほしい。

これらテ形複雑述語は、先行研究（特に国語学・日本語学）では多くの場合「テ+補助動詞」という扱いがなされており、それぞれの用法について主に意味の観点から分析されてきた。また、(1a) のテクル・テイクの一部や、(1f, g, h, i) に例示されている「テオク」「テシマウ」「テアル」「テイル」などはアスペクトを表す補助動詞としてしばしば言及される（たとえば金田一 1955, 吉川 1971, 高橋 1976, 寺村 1984, 益岡 1987など多数）。しかし「補助動詞」「アスペクト標識」というラベル付け自体にはさほど大きな意義はない。なぜなら「補助動詞」であるというのは「完全な動詞ではない」ということを意味するだけで、どのような点で完全でないかを示してくれるわけではないし、「アスペクト標識」と呼ぶのは良いとしても、テ形複雑述語の様々な意味パターンの一部にそのようなラベル貼りをする意味・意義はただちには明らかではない。たとえば「テシマウ」はアスペクトの意味をあらわす形式であるとしばしば先行研究で指摘され（上述の先

行研究を参照)、「テミル」はそのように分析されることはほとんどない。また、「テクル・テイク」の一部の用法はアスペクト形式だとされ、一部はそうではないとしばしば主張される(この点についてはのちに詳述する)。乱暴に言えば、これらの主張は「アスペクト」という物差しでテ形複雑述語の多様な意味特性を評価して、この場合はその物差しに合う、この場合は合わないと選別するタクソノミックなアプローチであるが、同時に、そうやってアスペクト形式かどうかを選別することによってテ形複雑述語の意味論の何が明らかになるのか、はっきりしないケースが多い。テ形複雑述語について本当に検討すべきことは、補助動詞やアスペクト標識としての認定の可否ではなく、どの形式がどのような形態統語論的特性・意味論的特性を持つのかということであり、それら特性を導くメカニズムを追求することことであろう。

そのメカニズムについては主として二つの立場が明示的・非明示的に提示されている。一つはテ形複雑述語の形態統語論・意味論的特徴を文法化現象として捉えるということである。文法化とは、内容語がそのいくつかの特性を失うなどして、機能語の色を帯びる、あるいは機能語になってしまう通時的な現象であるが、先行研究においては、文法化は内容語から機能語へ方向でしか起こらず逆はないという「一方向性仮説 unidirectionality hypothesis」(Heine and Kuteva 2002 など)や、文法化一般に連続的な段階を仮定する「文法化の連続的変異 cline of grammaticalization」(Hopper and Traugott 2003 など)が提唱されており、文法化現象に普遍性を見出すアプローチが取られることが多い。そういった文法化の連続的変異を駆動する要因を議論の俎上に乗せる限りにおいて、文法化理論は言語現象を「説明」しようとするモデルであると言える。テ形複雑述語については説明原理としてしばしば「文法化」ということが無批判に持ち出されるが、このことの問題点については後述する。また、特にテクル・テイクについては Shibatani (2007) が明示的な文法化仮説を提示しており、本稿で詳細に取り扱う。

もう一つは、現代日本語のテ形複雑述語の特性を共時的文法メカニズムから説明しようとする立場である(Nakatani 2013 など)。この立場においては、母語話者が通時的現象へアクセスすることなく言語を習得することから、意味拡張現象についても、母語話者の内的な言語メカニズムに駆動される意味操作が仮定される。

どちらのアプローチがテ形複雑述語の分析において

適切なのかということを考えるにあたって問題を複雑にしているのは、文法化が何についての理論なのかということが時にあいまいであるということである。文法化は通時研究の一つとして始まったが、そこに類型論的考察や認知言語学の説明原理の導入がなされるにいたって、通時変化の原理を超えた共時原理の色を帯びるようになった。たとえば Heine (1993: 132) は文法化のアプローチにおける言語の捉え方について、“Rather than interpreting language as a state or a product, or a historical tradition, it is conceived of here as an activity, and as a process.” と述べている。また、三宅 (2005) も「共時的研究において、文法化という視点を導入するということにも、十分な有効性があると認める」とする。しかし、「文法化」という動的な概念が、共時的言語のシステムのなかでどのような位置付けにあるのかは不明な点が多い。つまり、文法化が通時現象を捉える理論である限り、それは実証された通時変化の背後にある法則を解明するものであることが明らかであるが、文法化が共時的現象にまで適用範囲を広げた場合、共時現象の主体である母語話者あるいは母語話者共同体の何を説明する理論なのか、不明確であるケースがみられるように思われる。

いっぽう、テ形複雑述語に限定した話であるが、Nakatani (2013) のような共時アプローチにおいては、母語話者が通常アクセスできない通時変化は考慮からはずされ、母語話者が母語獲得の過程で得る言語入力と、入力をもとに文法を構築する言語獲得装置および言語計算メカニズムとの相関として意味拡張が捉えられる。つまり、このアプローチは母語話者に内在する「理論」を明らかにすることを目標とすると言える。すべてのテ形複雑述語の現象がこの語彙的關係性の「理論」に基づくわけではないので、「理論」の予測に反する限りにおいて、入力ベース(経験ベース)のアドホックな学習を仮定せねばならない。この観点からすると、文法化を含めた通時現象は、母語話者の「理論」、母語話者が得る言語入力、そして共同体レベルの外的要因などが総合的に影響しあった「結果」をベースとした一般化であると考えられる。

ではそもそもなぜテ形複雑述語の派生について、母語話者の内在的「理論」を仮定したほうが良いと考えられるのか。たとえば英語の法助動詞のように(ほぼ)完全に文法化が完了している場合は特に「理論」を仮定する必要はない(たとえば母語話者が can の形態統語論や意味論を獲得する際に動詞の can を前提として助動詞の can を学習するという派生を仮定する必要は

ないし、そう考えるべき証拠もない)。しかし、テ形複雑述語に関しては「文法化」しきっていないという点に大きな特徴がある。たとえば DeLancey (1991) は動詞連鎖の片方が助動詞化する段階を以下のように仮定している。

- (2) a. “Serialization” via dropping of the mark of subordination in the first verb in a clause chaining construction
- b. “Auxilialization”—the loss by the grammaticalized verb of its phonological and morphological independence
- c. “Morphologization”—the grammaticalized morpheme occurs as a finite verb inflection

ところがテ形複雑述語の場合、(a) の段階さえ達成していない。つまり (1) の例をみても V1 テ V2 における「補助動詞」V2 は不規則活用（特にクルの活用）を含め屈折を一切失っていないし、従属節標識テも健在である。尊敬語化についてもすべてではないが一部本動詞との平行性が見られる（e.g., イル→イラッシャルに対し、寝テイル→寝テイラッシャル；シマウ→オシマイニナルに対し、食べテシマッタ→食べテオシマイニナッタ）し、たとえば英語の法助動詞が統語分布上の制限が強く、積み重ねられないのと対照的に、これら「テ形補助動詞」は比較的自由に重ねることが可能である（e.g., 食べテシマッテホシイ；食べテミテアゲタ）。また、これら「テ形補助動詞」は否定辞 -nai や使役接辞 -sase, 受動態接辞 -rare の外側でなく内側に来る（連レテコ-サセ-ラレ-ナカッタ）という点でも通常の本動詞と同様の統語的分布を見せるといえる。

もちろん、これら「補助動詞」は「本動詞」の意味論・形態統語論・音韻的特性の一部を欠いていることは確かである。たとえば本動詞と違い、縮約が可能である（e.g., 食べテアゲル→食べタゲル；食べテイル→食べテル；など）し、本動詞の尊敬語形態もすべての場合で使えるわけではない（後述）。しかし、「本動詞」の特性を一部失っている」という事実自体は、母語話者に内在する語彙の関係性についての「理論」から説明可能である限りにおいて、共時的派生の立場にとっては問題ではない。

なにより重要な事実、これらテ形「補助動詞」が、その「本動詞」バージョンと、共時的に完全に共存しているということである。しかも、これら本動詞用法が「廃れなかった表現」としてかろうじて残っている

のではなく、クル、イク、アゲル、クレル、モラウ、ミル、ミセル、オク、シマウ、アル、イル、ホシイといった本動詞は、現役の高頻度動詞として日常使われる語であるという点である。そこが「本動詞が本動詞の用法を失って助動詞に変貌してしまう」通常の助動詞化 auxilialization と決定的に異なるテ形複雑述語の特性であり、テクルとクル、テアゲルとアゲルなどの語彙の関係性について母語話者が何らかの「理論」を持っていると仮定すべき強い動機となっている。逆にいえば、母語話者がテクルのクルと本動詞のクル、テアゲルのアゲルと本動詞のアゲルの関係性について、何の関連付けも行っていない（よって、完全に別個の語と認識している）と考えるのは（一部例外を除き）きわめて不自然だということである。

では、このような特性を持つテ形複雑述語について、「文法化」の観点から説明を与える研究者はどのような論拠を持って文法化アプローチを提唱しているのだろうか。前述したように、多くの先行研究では「文法化している」という文言を「補助動詞っぽい性質を帯びている」程度の意味で使っているようであるが、Shibatani (2007) はテクル・テイクについてさまざまな診断テストをもとに詳細に文法化仮説を提唱している。次節では Shibatani (2007) の診断テストを批判的に検証し、提唱されているクル・イクの「文法化の連続的変異」が、テ形複雑述語全体の意味論の共時的計算から導かれる現象であることを示す。次々節では Nakatani (2013) をベースに母語話者の共時計算モデルを示す。

なお、確認しておくが、テ形複雑述語は V1 テ V2 の形を取るが、「テ V2」が一つの語を成しているというわけではない。テは明らかに接頭辞ではなく接尾辞であり、V1 に形態論的に付属する。また、Martin (1975) などが指摘するように、テ形複雑述語内であったとしても、焦点を表す接辞を V1 テに付けることができる（食べテサエクレタ）。よってテと V2 は語彙的に連なっているとは考えられない。本稿では便宜上テクル、テシマウなど、「テ V2」という伝統的な表記を採用するが、あくまで「V1 テと複雑述語を成した場合の V2」を本動詞の V2 から区別するための便宜上の表記であって、「テ V2」が一つの語彙的なユニットだと考えているわけではない。なお、テと V2 は縮約できる（たとえばテアゲル→タゲル）という事実があるため、テは V2 とも何らかの緊密性を持つと考えなければならないが、前述したように焦点標識がテに後続できることを考えると、テと V2 の緊密性は語彙

レベルではなく統語レベル（あるいは音韻レベル）で達成され则认为なければならない。これに関して Nakatani (2013) は、統語派生において主要部移動によってテと V2 が併合し、それが音韻縮約の引き金となると仮定している。

2. Shibatani (2007) の診断テスト

本節では Shibatani (2007) のテクル・テイクの文法化仮説を検証する。Shibatani はまず寺村 (1984) がテクルについて示した下記のタクソノミーを批判的に取り上げている。

- (3) a. V-V 型（並列型）疲れたから、ちょっとコーヒを飲んでくる。
 b. v-V 型（様態型）毎朝会社へ歩いてくる。
 c. V-v 型（アスペクト型）空が明るくなってきた。

この分類において、V/v の区別は意味的な主従の関係を表す。さらに寺村 (1984: 158) は特に (3c) について、その判定基準を以下の2条件を満たすものと規定している。

- (4) a. 「X が……～テクル」はいえるが、「X ガクル」とはいえないもの（つまり X が V と共起関係をもち v とはもっていない）
 b. ～テクルが、X の物理的移動でなく、「X が V スル」という現象の話し手への接近を表わすもの

そのうえで寺村は (3c) のテクルを「アスペクトの形式」と呼び、(3a, b) と区別している。換言すれば、(3c) のテクルは本動詞のクルからもっとも離れた形式であるということであり、(寺村自身はそのような用語は使っていないが) もっとも文法化が進んだ形式だと考えることができる。

さらに寺村 (1984: 159) は入ッテクル、出テクル、帰ッテクル、乗りコンデクル、近寄ッテクルのような例も V-v 型だとする。その根拠は以下の通りである。まず、これらの V1 テが移動様態を表すとはいえないので v-V 型ではない。そのうえで寺村は「むしろ、『近ヨル』『帰ル』『入ル』という動作、できごとが、話し手に向かって進行するということ～テクルのクルは表わしていると見るのが自然であろう」と述べ、

(3c) のクルのような「(典型的な) アスペクトの表現形式」と「本質的には同じ働きをしていると見ることができるであろう」とする。

これに対し Shibatani (2007) は寺村の言う3タイプ、すなわち V-V 型、v-V 型、V-v 型はクル・イクの文法化の連続的段階としては、v-V 型→「入ッテクル」タイプの V-v 型→V-V 型の順序であると主張する。

(5) Less grammaticalized (より動詞らしい)

- ↑
 (i) 歩イテイク/クル ……寺村の v-V
 (ii) 入ッテイク/クル ……寺村の V-v
 ↓
 (iii) 飲ンデイク/クル ……寺村の V-V
 More grammaticalized (より動詞らしくない)

つまり、物理移動の意味の残るテクル・テイクのうち、寺村の V-V タイプがもっとも文法化が進んだものとして主張されている。その根拠として、以下の5つの基準を Shibatani は挙げている。

- (6) a. ミエル置き換え (*mieru* suppletion)
 b. ラッシャル縮約 (*rassharu* truncation)/ク縮約 (*ku* contraction)
 c. 断片表現 (fragments)
 d. 否定の作用域
 e. 項の認可

これらの規準に照らし、本動詞のクル/イクと同様のふるまいをする度合いに応じてテクル/テイクは本動詞に近いということになる。このうち (6b) の「ラッシャル縮約」と「ク縮約」は、文法性判断についての議論ではなく、Google を用いた予備的な頻度調査に基づく「使用傾向」についての（潜在的には興味深い）議論であるが、この調査の妥当性の検証には厳密なコーパス研究が必要で本稿の議論の範囲を超えるので、取り上げない。以下にそれ以外の4つの論拠を概観し、批判的に検証する。

強調しておきたいことは、本稿は V1 テクル・テイクが「場合によって異なるふるまいを示す」ことを否定したいのではない。本稿の趣旨は、それぞれの「場合」をクル・イクの「文法化」として捉えることに疑義があることを示すことにある。そのうえで、V1 テクル・テイクのバリエーションは、複雑述語を構成する VP1 およびテの意味論を含めた共時的な意味計算の結果として捉えなければ、特定の予測をする理論として成立しないと主張する。もちろんその「共時的な

意味計算の結果」に「文法化」のラベルを貼ることは可能であるが、それは現象のカテゴリゼーション、タクソノミーに過ぎないのであって、現象の説明とはならないことを指摘する。

なお、次節に移る前にもうひとつ注記したいことは、前述したように寺村（1984）は V-v として、空ガ明ルクナッテキタ（3c）や腹ガヘッテキタのように、明らかに物理的移動がない例と、入ッテクル、出テクルのように、クルが物理的移動を表しているようにみえる例の、二種類を含めている。寺村（1984：159）は、両者は「本質的に同じ」とするが、前者のクルと同じように後者のクルに物理的移動がないという積極的な証拠は挙げられておらず、二者を「同じ」とする論拠は強いとはいえない。注意すべきは、Shibatani の文法化の連続的変異の図は、物理的移動をとともなうテクル・テイクのみを含んでおり、（5-ii）で挙げられている「寺村の V-v」とは、後者の入ッテクル型のみを指しているという点である。Shibatani 自身は「寺村の V-v」のうち、前者の明ルクナッテクル型のクル・イクは「アスペクト形式」として（5）の図式のクル・イクとは異なるカテゴリー（おそらく（5）よりさらに文法化が進んだカテゴリー）として捉えている（Shibatani 2007：125-127）。以上を念頭においたうえで、Shibatani の文法化仮説の論拠を検証する。

2.1. ミエル置き換え

まずミエル置き換えであるが、これはクルがミエルという尊敬語の置き換え形（補充形）を持つことを利用し、テクルをテミエルに置き換えられるかをテストすることにより、本動詞の機能を残しているかを診断するものである。Shibatani（2007：116）は以下のような容認性判断をもとに、「飲ンデクル」型が他の二つと異なると主張した。

- (7) a. 山田先生は学校に歩いてきた/みえた。
- b. 山田先生が教室に入ってきた/みえた。
- c. 山田先生は一杯飲んできた/*みえた。

しかし筆者には（7c）のミエル形の容認性が（7a, b）と大きく変わるように思えない。特に（7b）と（7c）の違いはほとんどないように感じられる。これらの容認性判断を難しくしているのが、「V テクル」が複雑述語を形成しているのか、それともクルが本動詞のまま残っているのか（V テ、ソシテ、クル）、表面上区別できないことにある。もし複雑述語構文ではなく本

動詞構文と解釈すれば（7a-c）についてミエルの容認性は変わらなくなってしまう。これを解決するために否定対極表現 Negative Polarity Item (NPI) をもちいた「ナニモ V1 シテコナカッタ」の診断を考えてみよう（McCawley and Momoi 1986; Nakatani 2001, 2013）。ナニモといった NPI は否定辞ナイによる認可を要求するが、通常の付加詞としての（つまりテ形複雑述語を為さない）テ句は否定辞ナイによる NPI 認可の障壁になるため、ナイがテ境界を超えて NPI を認可することはできない。

- (8) a. *[山田先生は何もたずさえて], 会場に来なかった。(cf. [何もたずさえないで] 来た)
- b. *[山田先生は一滴も飲んで], 会場に来なかった。(cf. [一滴も飲まないで] 来た)

しかし、V1 テが V2 とともに複雑述語を為すとき、否定辞ナイはテを超えて NPI を認可できる。

- (9) a. 山田先生は何もたずさえてこなかった。
- b. 山田先生は一滴も飲んでこなかった。

このケースでミエルが使えるかを考えてみると、筆者の内省では難しい。

- (10) a. *山田先生は何もたずさえてみえなかった。
- b. *山田先生は一滴も飲んでみえなかった。

(10a) は Shibatani の（7a）（寺村の v-V 型）、(10b) は（7c）に相当するが、両者で NPI 認可が難しいことを考えると、（7a-c）に対する Shibatani の文法性判断は、本動詞のクルに対する判断が混入している可能性が高いと考えられ、テクルのタクソノミーについての論拠とするには慎重にならねばならないだろう。

なお Shibatani（2007：127）は、寺村の V-v のメインカテゴリーである「物理移動のないテクル・テイク」をアスペクト形式として本節のクル・イクと区別し、その証拠の一つとしてミエル置き換えが不可能なことを指摘している。

- (11) 佐藤先生は正直に生きてきた/*みえた。

この観察に疑義はない。Nakatani（2013：194-197）の分析においては、このタイプのクル・イクは主題の事象化操作が適用されていると捉えるので、このタイプ

のクル・イクの「主語」は「佐藤先生」とはならない。よって尊敬語化が起きないことが説明される。

2.2. 断片表現

通常の付加詞としてのテ句は Yes-no 疑問文に対する返答として断片表現を許す (Shibatani 2007: 120-121)。

- (12) a. 自転車に乗って学校へ来たの？
b. うん、自転車に乗って。

これに対し、Shibatani (2007) の観察によれば、3種のテクル構文は断片表現について異なるふるまいを見せる。

- (13) a. 歩いてきたの？
b. ?うん、歩いて。
(14) a. 出てきたの？
b. *うん、出て。
(15) a. 一杯飲んできたの？
b. *うん、飲んで。

この違いの解釈について Shibatani は、(13) のタイプ (寺村の v-V) はクルと V1 の結びつきが緩く、独立性が高いためにテ句の断片表現が許されるのではないかとしている。つまり、(13) ではクルが本動詞に近く、(15) では文法化が進んでいると主張されている。

しかし、(15) について言えば、以下のようにすれば断片表現も容認度がかなり上がる。

- (16) a. 一杯飲んできたの？
b. ?うん、一杯飲んで。

よって、V-V だからといって必ずしも断片表現が不可能というわけではないといえる。また逆に、v-V タイプでも、V1 が他動詞でかつ断片表現で目的語を省略すれば、(17) に示すように容認度が下がる。つまり、項の有無といった統語的条件も容認性に影響を与える。

- (17) a. 奥さんを連れてきたの？
b. *うん、連れて。/?うん、かみさんを連れて。

よって、Shibatani の指摘するほど単純に文法化の

ステージに対応した容認度の対比が見られるわけではないといえる。ただ、様々な例を観察すると Shibatani の指摘通り、V-V タイプでは断片表現が不自然に響く場合が多いようである。

- (18) a. 焼肉食べてきたの？
b. *うん、焼肉食べて。
(19) a. ケーキ焼いてきたの？
b. *うん、ケーキ焼いて。

ここで問題になるのはなぜ同じ V-V タイプでも (16) は (18), (19) より容認度が上がるかである。その理由がなんであれ、そのふるまいは V1 テ (正確には VP1 テ) の意味論を度外視しては説明できないだろう。換言すれば、クル・イクの理論がクル・イクの文法化のタクソノミーである限り、説明には限界が付きまとう。本稿の立場は、テクル・テイク構文の細かな違いはクル・イクの文法化ではなく、VP1, テ, V2 のそれぞれの意味論を統語構造の中で共時的に計算した結果であると捉える。たとえば (16) と (18), (19) の違いは、クルの違いではなく、VP1 事象からの推意とクル事象からの含意の時間的關係の違いにある可能性がある。そのロジックは具体的には以下の通りである。まず留意すべきは、物理移動をとまなう「X が VP1 テキタ」の場合、キタからの含意により、X が発話場所にイルことが強く推論されるということである。つまり X がキタからの含意により「X がここにいる」という状態が発話時に真であるという前提がとられる。ここで以下の仮説を立てる。

- (20) X が VP1 テキタの解釈においては、「X がここにいる」という状態が発話時に成立しているという強い推論を伴うため、キタを省略した VP1 テという断片表現の容認度は、VP1 事象からの推意が「X がここにいる」こととどの程度時間的な親和性を持つかによる。

つまり、焼肉食べテやケーキ焼イテは、「X がここにいる」状態と時間的に離れており時間的親和性が薄いため、キタを省略するのに十分な意味的支えがなく、容認度が下がる。いっぽう、一杯飲ンデの推意は「ほろ酔いの状態である s_1 」であるが、これはキタからの含意「ここにいる s_2 」という状態と時間的親和性が高い。よって、キタの省略がある程度容認される。

- (21)
- | | | |
|------------------------|---------------|--------------------------------|
| | Speech time | |
| VP1 「一杯飲んだ」 at t_1 → | s_1 ほろ酔いである | ごはんをすませた人はいなかった」 |
| V2 「きた」 at t_2 → | s_2 ここにいる | *広い作用域解釈「誰も来なかった (ごはんも食べなかった)」 |

興味深いことに、(18) や (19) のような例でもクルのかわりにテイクを使うと断片表現の容認度は多少上がるようである。

- (22) a. 焼肉食べていったの？
 b. ? うん、焼肉食べて。
 (23) a. ケーキ焼いていったの？
 b. ? うん、ケーキ焼いて。

この場合は、VP1 事象もイク事象も、発話時間・場所から切り離された過去の話である。よって、VP1 と V2 の時間のズレはさほど問題とならず、断片表現が許されるのではないかと考えられる。

これらの説が正しいかについてはさらなる検証が必要であるが、いずれにしろ、クル・イクの文法化のステージを議論するだけでは説明できないのは明らかに思われる。

2.3. 否定の作用域

テ形複雑述語に付加された否定辞の作用域には、
 (i) VP1 テ V2 全体を否定する広い作用域の解釈と、
 (ii) VP1 のみを否定する狭い作用域の解釈の、二通りの可能性があるが、Shibatani (2007: 122-123) はテクル・テイクに関して、v-V タイプには広い作用域の解釈が許されるのに対して V-V タイプでは狭い作用域解釈 (VP1 のみを否定する解釈) しか許されないことを以下の例で指摘している。

- (24) a. 誰もバスに乗ってこなかった。(寺村の v-V)
 狭い作用域解釈「来たことは来たけれど、バスを利用した人はいなかった」
 広い作用域解釈「誰も来なかった (バスにも乗らなかった)」
 b. 誰も部屋から出てこなかった。(寺村の V-v)
 *狭い作用域解釈「来たことは来たけれど、部屋からは出なかった」
 広い作用域解釈「誰も来なかった (部屋から出なかった)」
 c. 誰もごはんを食べてこなかった。(寺村の V-V)
 狭い作用域解釈「来たことは来たけれど、

Shibatani の判断によれば (24a) ではクルを含めた広い否定の作用域の読みも可能である一方、(24c) ではそれが不可能である。Shibatani (2007: 123) はこの事実をもとに、(24c) におけるクルはより文法化の進んだ、接辞的な性質を持っていると主張する (“The motion verb here [(24c)] is thus behaving more like an affix, which cannot support negative scope independently of the root to which it is attached”)。

しかし筆者の内省では、(24a) の広い作用域解釈は難しい。その難しさは「誰も」を固有名詞に置き換えるとさらに強まる。

- (25) 太郎はバスに乗ってこなかった。
 狭い作用域解釈「太郎は来たけれど、バスは利用しなかった」
 ?? 広い作用域解釈「太郎は来なかった (バスにも乗らなかった)」

筆者の内省では (25) における「来なかった」読みは困難である。さらに、同じことはテ形複雑述語構文を使わなくても観察される。

- (26) 太郎はバスで来なかった。
 狭い作用域解釈「太郎は来たけれど、バスは利用しなかった」
 ?? 広い作用域解釈「太郎は来なかった (バスにも乗らなかった)」

上記 (26) において「来なかった」読みが非常に難しいのは、グライスの協調の原理から説明できる (Grice 1975)。すなわち、太郎が来なかったならば、いかなる移動手段も使わなかったことは自明であるため、協調の原理に従うならば「バスで」という情報を加えるべきではない (量の格律)。よって、(26) は、「来た」ではなく、「バスで」が否定のターゲットであるという解釈が突出する。ここで「来る」が否定される解釈が (ほぼ) ないことは、「来る」が本動詞か接辞かということとは無関係であるとは明らかである。

まったく同じ説明は (25) にも適用可能である。となれば、作用域の解釈の問題は、クルが動詞なのか接辞なのかという形態統語論的な問題とは独立した問題

であることになる。

ちなみに、固有名詞を用いた (25) に比べると、「誰も」を用いた (24a) の方が若干「来なかった」読みが、相対的にであるが、得やすいように感じられる。しかしそれはテ形複雑述語を用いなくても同じことである。つまり、「太郎はバスで来なかった」と「誰もバスで来なかった」を比べると、後者の方が「来なかった」読みが得やすいように思う。「誰も」が否定辞を要求する否定対極表現であることが「来なかった」解釈の強化に貢献しているのかもしれない。

次に、(24a) と (24c) の比較であるが、話者によっては後者の方が前者より「来なかった」解釈が難しいと判断するかもしれない。しかしそれは VP1 事象と V2 事象がどの程度融和的であるかというコヒアランスの問題であるように思える。否定の広い作用域解釈を得るためには VP1 と V2 の両方が否定されなければならない。これら二つを分離して独立した否定文にした場合、容認性判断は異なるように思える。

- (27) a. 誰も来なかった。バスにも乗っていなかった。
b. 誰も来なかった。ごはんも食べていなかった。

上記 (27a) と (27b) の自然さを比べると、明らかに後者の方が不自然のように感じられる。よって (24a) と (24c) の広い作用域解釈（「来なかった」解釈）の得やすさの違いもここに起因する可能性がある。

最後に、(24b) にも触れておきたい。これに関しては、解釈の容認性において (24a, c) とは逆のパターンを見せている。つまり、広い作用域の解釈しかなく、狭い作用域の解釈（「来たけれど出なかった」）がない。これについては Shibatani (2007: 123) は、理由は“unclear”としつつも、出テクルの出テのみを否定のターゲットとしても、出テの代わりとなる選択肢が想定できないからかもしれないと述べている。別の観点から言えば、出テクルの出ルはクルを含意しているため、片方のみを否定することができないからと考えることもできるかもしれない。また、「部屋から」のかわりに「扉から」にすれば、そこをターゲットにした狭い作用域の解釈が得られる。

- (28) 誰も扉から出てこなかった。

狭い作用域解釈「みな出てきたけれど、扉からではなく（例えば）窓を通ってきた」

この観察もまた、クルが否定のターゲットになるかど

うかという問題を、クルの文法化の問題に帰することの妥当性に疑義を生じせしめている。

以上の考察から分かるように、テ形複雑述語の否定の作用域の問題は VP1 と V2 双方の意味論から計算される問題であり、クル・イク単体の文法化の問題として考えることには限界があると考えられる。

2.4. 項の認可

Shibatani (2007: 119-120) は、クル・イクが V1 とは独立して項を認可できるかどうかという点において、違いが観察できることに着目した (cf. Nakatani 2001, 2013)。そして寺村の v-V タイプ (5-i) は項認可が可能だが、V-v タイプ (5-ii) や V-V タイプ (5-iii) では不可能であるということを根拠に V-v および V-V タイプのイク・クルがより文法化が進んでいると主張する。

- (29) a. 太郎は歩いて、学校にいった/きた。
b. 太郎は学校に歩いていった/きた。
(cf. *太郎は学校に歩いた)
- (30) a. 太郎は自分の部屋を出て、花子の部屋に行った。
b. *太郎は花子の部屋に自分の部屋を出ていった。
- (31) a. 太郎はリンゴを食べ、学校に行った。
b. *太郎は学校にリンゴを食べていった。

つまり、(29b) のイク・クルはより「動詞らしい」ので項認可能性が残っているが、(30b)、(31b) では文法化が進んでいるため項認可能性を失っているということである。

しかしそもそも、文法化が進めば（つまり、機能語に近づけば）項認可能性を失うという前提は必ずしも正しいとはいえない。まず第一に、日本語においては、受け身や使役のように、接辞の存在により二格が認可されるという現象がある。つまり、接辞だからといって項認可に貢献できないとは限らない。

- (32) a. 息子が先生に褒められた。
(cf. *先生に褒めた/*息子に褒めた)
- b. 親が息子にチョコを食べさせた。
(cf. *息子にチョコを食べた)

また、テ形複雑述語のなかには、元の物理移動の意味を失っている（「文法化」がより進んでいる）例で

の文法化よりもしばしば意味的な文法化 (cognitive grammaticalization) が先行することから、意味的な文法化が「瞬間的に」起こる可能性を示唆した。

- (39) [C]ognitively, grammaticalization is not a gradual process, but rather an instantaneous one. It involves the mental act of the mind *recognizing a similarity relation* and thereby exploiting it, putting an erstwhile lexical item into grammatical use in a novel context. The minute a lexical item is used in a frame that *intends it as grammatical marker*, it is thereby grammaticalized. (Giv'n 1991: 122)

Shibatani (2007) は特に意味的な文法化と形態統語論的な文法化を区別せず、物理移動を表さないテクル・テイクは「瞬間的に文法化」した可能性を提案する。たとえば、腹ガ減ッテクルのようなコンテキストでクルが使われると、その「瞬間」に文法化が達成されるということだろう。しかし「あるコンテキストで使われた瞬間に文法化が達成される」という仮説は、何についての仮説なのだろうか。文法化を通時研究の理論として考えれば、瞬間的文法化とはある世代で突然その用法が発生し、完成するということになるだろう。たとえばテイクの非物理的移動の用法はおおよそ中世日本語から見られる (cf. Shibatani and Chung 2007; Arai and Hidaka, forthcoming) が、その発生はある世代において瞬間的に起こったということになるだろう。ではその「瞬間的文法化」を駆動するものは何だろうかかと考えると、それは母語話者による共時的な判断の結果ということになる。つまり、この「瞬間的文法化」の仮説は、通時研究としての文法化の文脈を離れば、結局、共時的意味計算能力についての仮説ということになる。共時計算の仮説においては、その「瞬間的文法化」を駆動するメカニズムは、文法化発生後のすべての世代において、言語獲得の過程でその都度働くと考えられる。第1節でふれたように、テ形補助動詞は、その本動詞の用法が共時的に完全な形で残っているだけに、補助動詞と本動詞の語彙的關係性についての「理論」が母語話者の言語知識の一部を成していると考えるべき理由がよりいっそう強くあると考えられる。

また、Shibatani (2007) はテクル・テイクについて、物理的移動の意味が残るものについて3レベルの文法化ステージ (それぞれクル・イク₁、クル・イク₂、クル・イク₃と呼ぶことにする)、そして物理移動のない場合についてもう1レベルの文法化ステージ (クル・

イク₄)、合計4レベルの文法化の(連続的)変異を提唱しているが、注目すべきは、この4種のクル・イクは別個の4つの補助動詞として固定しているわけではないということである。たとえば、出テクルのクルはクル₂であるが、このクルはクル₁やクル₃と置き換わることがない。また、腹ガ減ッテキタのキタはクル₄であるが、それが他のタイプのクルに置き換わることもない。つまり Shibatani (2007) の文法化レベルの認定は、組み合わせられる VP1 の意味論に依拠して変わるのであり、「意味的不調和により文法化のステージが変異する」というのは、逆にいえば、「テ形複雑述語においてどのクル・イクがあらわれるかは VP1 次第」ということである。これは Pustejovsky (1995) がいう「相補的多義性 complementary polysemy」のケースに他ならない。Pustejovsky は相補的多義性を多義リストとして捉えることの問題点について詳しく論じたが、クル・イクの相補的多義性を補助動詞のタクソノミーによって捉えることも、理論の予測を欠くという点で大きく問題であるように思われる。本節では Nakatani (2013) をもとに主に項認可について、共時的意味計算という観点から代案を導入する。

まず、顕在項についての使役連鎖の適格性条件を考える (Nakatani 2013: 188-191, 216)。この仮説は Pustejovsky (1995) の生成レキシコン理論を土台とする。生成レキシコンとは、語が他の語と組み合わせる際に意味の調整を可能にする、拡大合成的な語彙意味論モデルである。語の意味はいくつかの事象性の束として捉えられるが、それらは人間の語彙知識の中で単に時系列的な連鎖として捉えられるのではなく、アリストテレス的な因果関係として捉えられる。すなわち、ある語 w の意味は、 w が「何であるか」を指定する形質相 FORMAL QUALE, w のメロニミー (全体・部分の関係) に関する情報を指定する構成相 CONSTITUTIVE QUALE, w の形質相・構成相を出現させしめたものは何かという情報を指定する作用相 AGENTIVE QUALE, そして w の典型的な目的を指定する目的相 TELIC QUALE という4つの相からなるクォリア構造を持つと考える。これら定義を時系列 (<) で考えれば、作用相によって形質相と構成相がもたらされ、目的相は内包演算子としてその可能な「未来」を指定するということになる。

(40) 語彙知識におけるクォリア構造

$$\begin{array}{l} \text{作用相} \\ \text{AGENTIVE} \end{array} < \left\{ \begin{array}{l} \text{形質相 FORMAL} \\ \text{構成相 CONSTITUTIVE} \end{array} \right\} < \begin{array}{l} \text{目的相} \\ \text{TELIC} \end{array}$$

このように、生成レキシコン理論の特徴は、語の意味を構成する要素が因果関係をベースにした論理関係の上に立っていると仮定する点にある。逆に言えば、複数事象が語彙化するためにはその複数事象がクォリア構造に即した構成を成していなければならないということである。いっぽう、統語上で形成される複文構造などでは、上記のような単一の論理関係構造が成り立つ必要はない。さらに、複雑述語や serialization の場合は、複文構造と単一語彙の中間的な位置づけであるので、どの程度クォリア構造に適合すべきなのかはパラメーター化していると考えることができる。

たとえばテに導かれる従属節は通常の付加詞として複文構造を形成することができる（たとえば VP1 テ VP2 のような形で）。この場合、主節と従属節はそれぞれ独立したクォリア構造を成すと考えられる（以降、話を単純化するため、作用相と形質相に絞って議論を進める）。

- (41) $[[VP1]] \Rightarrow QUALIA1: AG < FM$
 $[[VP2]] \Rightarrow QUALIA2: AG < FM$
 (ただし $AG = AGENTIVE, FM = FORMAL$)

しかし、VP1-*te* と V2 がテ形複雑述語を構成する場合、単一のクォリアを成すことが期待される。つまり、二つのクォリア構造を一つに折り畳まなければならない。テ形複雑述語の場合、テが時間的連続をあらわすと考えられる（Nakatani 2003, 2013, Chapter 4）ので、クォリア構造の時間的特性（AGENTIVE が FORMAL に先行する）に合わせると、VP1 のクォリア構造がテ形複雑述語全体のクォリア構造の作用相 AG、V2 のクォリア構造が形質相 FM を占める形であらたな単一クォリア構造が形成されると考える。

- (42) $[[VP1-te V2]] \Rightarrow QUALIA: AG = QUALIA1 < FM = QUALIA2$

たとえば以下の例では複文構造なので、独立したクォリア構造の積み重ねが許容される。

- (43) a. 太郎は歩いて公園にきた。
 b. ARGSTR: $x = \text{Taro}, y = \text{park}$
 $QUALIA1: FM = \text{walk}(e_1, x)$
 $QUALIA2: AG = \text{act}(e_{2a}, x) < FM = \text{arrive.at}(e_{2b}, x, y)$
 (ただし ARGSTR = ARGUMENT STRUCTURE)

しかし VP1 テと V2 がテ形複雑述語を形成する場合、単一のクォリア構造が形成される。

- (44) a. 太郎は公園に歩いてきた。
 b. ARGSTR: $x = \text{Taro}, y = \text{park}$
 $QUALIA: AG = \text{walk}(e_1, x) < FM = \left\{ \begin{array}{l} AG = \text{act}(e_{2a}, x) < \\ FM = \text{arrive.at}(e_{2b}, x, y) \end{array} \right\}$

ここにおいて、もともとこのクルの意味論の作用相 $\text{act}(e_{2a}, x)$ は形質相 $\text{arrive.at}(e_{2b}, x, y)$ をもたらす事象であるが、その具体的内容は不完全指定（under-specified）であるため、あらたに特定の作用相 $\text{walk}(e_1, x)$ が融合されることによって抑制されると考えることができる。

- (45) a. 太郎は公園に歩いてきた。
 b. ARGSTR: $x = \text{Taro}, y = \text{park}$
 $QUALIA: AG = \text{walk}(e_1, x) < FM = \text{arrive.at}(e_2, x, y)$

V-V 型のテクル・テイク構文も同様に考えられる。

- (46) a. 太郎はごはんを食べてきた。
 b. ARGSTR: $x = \text{Taro}, y = \text{meal}, z: \text{SPEAKER_LOCATION}$
 $QUALIA: AG = \text{eat}(e_1, x, y) < FM = \text{arrive.at}(e_2, x, z)$

この (46) におけるクォリア構造においては v-V 型の (45) のそれに比べ、作用相 AG と形質相 FM の結びつきは弱いと言えるが、単一の語彙項目ではなく統語的複雑述語であるため、この緩やかなつながりが許容されると考える。特に (46) の場合、形質相 $\text{arrive.at}(e_2, x, z)$ が統語的に非顕在的なものとなっていることに注意されたい。すなわち、 $\text{arrive.at}(e_2, x, z)$ の主題 x は主要部事象たる作用相 $\text{eat}(e_1, x, y)$ の x に制御される存在であるし、 z は話者に関連付けられた場所という語彙的な指定がされているものの、具体的な場所は統語的には指定されていない。よって、(46) において形質相は統語的に背景化 shadowed されていると考えられ（Nakatani 2013: 190）、それにより、作用相と形質相の結びつきの弱さが問題にされないかと仮定する。

いっぽう、二格が顕在化する場合容認性が著しく

下がる。

FM=arrive.at(e_2, x, z)

- (47) a. *太郎は公園にごはんを食べてきた。
 b. ARGSTR: $x=\text{Taro}, y=\text{meal}, z:\text{park}$
 QUALIA: AG=eat(e_1, x, y)<
 FM=arrive.at(e_2, x, z)

この場合、(46)とクォリア構造は変わらないのだが、異なる点は、形質相のゴール項 z が統語的に顕在化しているということである。このような場合、作用相と形質相がともに統語的に顕在的となり、 x, y, z という三項に対してより強い解釈制約がかけられると考えられる。その解釈制約とは、原因事象たる作用相において x が y に対して働きかけるということが成り立つ場合、結果事象たる形質相においては x よりも y について述べられることが期待されるということである。このような制約はPustejovsky (1995: 186) のデフォルト使役パラダイム, Levin and Rappaport Hovav (1995) の直接目的語制約 Direct Object Restriction, Langacker (1987) のビリヤードボール・モデル Billiard-ball Model など、様々なコンテキストで様々な形で提唱されているが、Nakatani (2013) は、この適格性制約が、結果事象たる形質相が統語的に非顕在的なときには適用されず、顕在的なときには適用されると主張した。

(48) 使役連鎖の原則 Principle of Causation Flow

主要部事象たる作用相 AGENTIVE が被動作対象を含み、形質相 FORMAL が統語的に顕在的である場合、デフォルト使役パラダイム Default Causative Paradigm が遵守されなければならない。

- (49) デフォルト使役パラダイム Default Causative Paradigm (Pustejovsky, 1995: 186)
 QUALIA: AG= α _act(e_1, x, y)<
 FM= α _result(e_2, y)

この意味解釈上の適格性条件によって (47) が不適格となる。いっぽう、以下のような例では、仮説の予測では (47) と同様不適格となるはずだが、実際は二格が許容される。

- (50) a. 太郎は公園に荷物を背負ってきた。
 b. ARGSTR: $x=\text{Taro}, y=\text{baggage}, z:\text{park}$
 QUALIA: AG=shoulder(e_1, x, y)<

ここでは作用相の含意から y が x に伴うということが推論されるので、実質的にデフォルト使役パラダイムを遵守するという解釈が可能となり、使役連鎖の原則の違反が回避される。

- (50) c. ARGSTR: $x=\text{Taro}, y=\text{baggage}, z:\text{park}$
 QUALIA: AG=shoulder(e_1, x, y)<
 FM=arrive.at(e_2, y, z)

中谷 (2014) では、テアゲル・テクレル構文における二格認可も同様に、語用論的推論によって使役連鎖原則の違反が回避される程度に応じて容認度が上がるとされた。よって、(51b) より (51a) のほうが、容認度が上がる (cf. Shibatani 1996)。

- (51) a. お父さんが息子にスイカを切ってあげた。
 b. お父さんが息子に爪を切ってあげた。

(51a) では「お父さんがスイカを切って」<「スイカが息子に向けられる」という解釈がデフォルト使役パラダイムを遵守するのに対し、(51b) では「お父さんが爪を切って」<「爪が息子に向けられる」という解釈ができないという違いがある。なお、(51b) でも二格が非顕在的であれば使役連鎖の原則は適用されないで、適格となる。

テモラウ構文では作用相が埋め込み節 (VP1) に写像され、その作用相の結果 (Nakatani 2013: 175ff の言う、事象の伸張 STRETCH) の受け取りをあらわす形質相のほうが統語的には上位にある。

- (52) a. 太郎は花子に褒めてもらった。
 b. ARGSTR: $x=\text{Taro}, y=\text{Hanako}$
 QUALIA: AG=praise(e_1, y, x)<
 FM=have($e_2, x, \text{STRETCH}(e_1)$)

このように結果事象たる形質相のほうが主要部事象であり、原因事象たる作用相より統語的に上位に写像される場合においては、(48) の使役連鎖の原則は適用されない。同様の理由で、テホシイ構文のほか、受動態構文、使役構文などにおいても、二格の認可は使役連鎖原則に影響されず、構造格として付与されることが先行

研究で指摘されており（井上 1976, Kuroda 1979, 久野 1983, Nakatani 2013: 136-165, 229-230），未解決の問題も多いが，本稿の議論の範囲を超えているので取り上げない。いずれにしても，二格認可については，様々な意味的・語用論的・統語的要因が相互作用して，その可否が決定する。この問題に関して「文法化」仮説は事後的なタクソノミーにとどまる。

4. 結 論

本稿では，しばしば「文法化」という用語で捉えられるテ形複雑述語の分析について取り上げ，「文法化」が何を意味するのか，そして「文法化」としてテ形複雑述語を分析するのが適切かどうかを批判的に検証した。特にテクル・テイクについて明示的に文法化仮説を展開する Shibatani (2007) を取り上げ，文法化の連続的変異を意味的不調和から説明する仮説を考察した。そのうえで，テ形複雑述語においては補助動詞の用法が本動詞用法と完全に共存していること，そして Shibatani (2007) が文法化の連続的変異として規定するバリエーションが相補的多義性に相当することを指摘したうえで，テ形複雑述語については母語話者の共時的な意味計算の理論として分析することが適当だとの結論に達した。特に，Shibatani (2007) の意味的不調和と文法化の仮説については，その観察に妥当性を認めつつも，文法化が進む，進まないというだけでは理論としての予測が不足するとの指摘を行った。それにかえて，特に二格認可の現象を考察することにより，母語話者の共時的意味計算のモデルを Nakatani (2013) をもとに導入した。それは必ずしも文法化の仮説と矛盾するものではないが，文法化を駆動する仕組みを解明しようとする場合，結局，母語話者の共時的意味計算能力を解明するというアプローチを避けて通るわけには行かないことを本稿では示した。テ形複雑述語の研究において，文法化仮説はタクソノミーとして有効であるが，真に追及すべきはタクソノミーではなく共時的な説明原理であり，その説明原理で捉えられる現象と捉えきれない現象を切り分けることにより，よりいっそうの研究の前進が期待できるのではないだろうか。

参考文献

- Arai, Fumihito. and Toshio Hidaka. Forthcoming. A Formal Analysis of Japanese V-yuku and its Grammaticalization. (To appear in M. Kenstowicz, T. Levin and R. Masuda (eds.) Japanese/Korean Linguistics 23. Stanford CA:

- CSLI Publications.)
 DeLancey, Scott. 1991. The Origins of Verb Serialization in Modern Tibetan. *Studies in Languages* 15: 1-23.
 Givón, Talmy. 1991. Serial Verbs and the Mental Reality of 'Event': Grammatical vs. Cognitive Packaging. In E. Traugott & B. Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization, Vol. 1*. Amsterdam: John Benjamins. 81-127.
 Grice, Paul. 1975. Logic and Conversation. In P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York, NY: Academic Press. pp. 41-58.
 Heine, Bernd. 1993. *Auxiliaries: Cognitive Forces and Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.
 Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2002. *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Hopper, Paul J. and Elizabeth Traugott. 2003. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語』東京：大修館。
 Jackendoff, Ray. 2002. *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
 金田一春彦. 1955. 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X（文学4）：63-90.（金田一春彦（編）1976.『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房. 17-61.）
 久野暉. 1983. 『新日本文法研究』東京：大修館。
 Kuroda, S.-Y. 1979. On Japanese Passives. In G. Bedell, E. Kobayashi, and M. Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kaitakusya. 305-347. (Reprinted in S.-Y. Kuroda. 1992. *Japanese Syntax and Semantics*. Dordrecht: Kluwer. 183-221.)
 Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford, CA: Stanford University Press.
 Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
 Martin, Samuel E. 1975. *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven, CT: Yale University Press.
 益岡隆志. 1987. 『命題の文法—日本語文法序説—』東京：くろしお出版。
 McCawley, James D. and Katsuhiko Momoi. 1986. The Constituent Structure of -te Complements. *Papers in Japanese Linguistics* 11: 1-60.
 三宅知宏. 2005. 「現代日本語における文法化：内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1: 61-76.
 Nakatani, Kentaro. 2001. Applying Lexical Rules in Syntax: A Case Study of the V-te V Construction in Japanese. In Ora Matushansky, Albert Costa, Javier Martin-Gonzalez, Lance Nathan, and Adam Szczegielniak (eds.) *MIT Working Papers in Linguistics 40: Proceedings of the First Harvard-MIT Student Conference in Language Research*.

- 191-204.
- Nakatani, Kentaro. 2003. Analyzing *-te*. In W. McClure (ed.) *Japanese/Korean Linguistics 22*. Stanford, CA: CSLI Publications. 377-387.
- Nakatani, Kentaro. 2013. *Predicate Concatenation: A Case Study of the V-te V predicate in Japanese*. Tokyo: Kurosio.
- 中谷健太郎. 2014. 「使役連鎖の原則とテ形複雑述語における二格の容認性」岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』東京：ひつじ書房. 99-124.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. MIT Press: Cambridge, MA.
- Shibatani, Masayoshi. 1996. Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account. In M. Shibatani and S. A. Thompson (eds.) *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*. Oxford: Clarendon. 157-194.
- Shibatani, Masayoshi. 2007. Grammaticalization of Motion Verbs. In B. Frellesvig, M. Shibatani, and J. C. Smith (eds.) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*. Tokyo: Kurosio. 107-133.
- Shibatani, Masayoshi. and Sung Yeo Chung. 2007. On the Grammaticalization of Motion Verbs: A Japanese-Korean Comparative Perspective. In N. McGloin, and J. Mori (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 15*. Stanford: CSLI Publications. 21-40.
- 高橋太郎. 1976. 「すがたともくろみ」金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房. 117-153.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版.
- 吉川武時. 1971. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」*Linguistic Communications* (Monash University) 9. (金田一春彦（編）1976. 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房. 155-327. に再録)